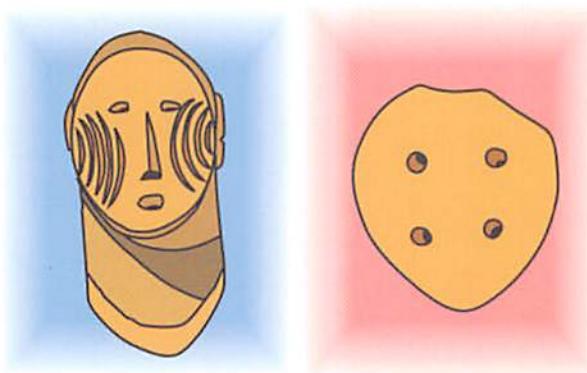


綾羅木郷遺跡って、

どん桙 遺跡 !?



下関市立考古博物館

はじめに

響灘沿岸の本州西端部は「北浦」と呼び慣わされていて、その西南部に位置する標高8～13mの洪積台地上に綾羅木郷遺跡が広がっています。遺跡は1969(昭和44)年にその一部が国の史跡指定を受けて保存され、この遺跡で発見された土器や石器などを展示している下関市立考古博物館は、史跡指定地の南側に隣接して1995(平成7)年に開館しました。

この遺跡がどのような遺跡であるのか、また、どういう経緯で国の史跡として保存されるに至ったかについては、「綾羅木郷遺跡Ⅰ」(下関市教育委員会、1981)や「史跡 綾羅木郷遺跡－下関の古代文化をめぐる－」(郷土の文化財を守る会、1995)などに詳しく書かれていますし、考古博物館でも『綾羅木郷遺跡への招待』(2001)というガイドブックを刊行しました。しかしこれらは、いずれも大人が対象ですから、その内容は小中学生にはむずかしくて理解しにくいものになっています。また、この遺跡についての質問を小中学生の皆さんから受けることがしばしばありますので、今回、社会科で歴史を学習する小学校高学年の児童と中学生を対象に、このガイドブックを刊行することにしました。

綾羅木郷遺跡の発掘調査と保存運動には、下関始原文化研究会をはじめとする多くの市民や学生、教員の皆さんのがボランティアで参加されたと聞いています。当時、遺跡を保存するのか、遺跡を壊しても産業開発を優先するのかで大きな社会問題となり、結局、緊急に史跡指定されて30年以上たちました。今なお、全国各地で繰り返されている“遺跡保存か開発優先か”という問題を目の当たりにする時、このガイドブックを手にされた小中学生の皆さんに、文化財保護について少しでも関心を持っていただければ、私たちにとってこれ以上の喜びはありません。

平成15年2月

下関市立考古博物館

目 次

はじめに

卷頭グラビア ······	3
1. 綾羅木平野の歴史 ······	5
2. 遺跡の発見とその保存まで ······	12
3. 綾羅木郷遺跡って、どんな遺跡？ ······	14
4. 弥生時代の村としての綾羅木郷遺跡 ······	19

例 言

- 1 本冊子は小中学生向けのガイドブックとして作成しました。
- 2 本冊子は本館学芸員の澤下孝信が執筆・編集しました。作成にあたり、下関市教育委員会の藤川貴和先生をはじめとして、先生方や小中学生の皆さんにも原稿を読んでいただき、多くのアドバイスを受けました。深く感謝いたします。
- 3 本文中に掲載した図面の出典は巻末に示しましたが、それ以外にも多くの文献を参考にしています。

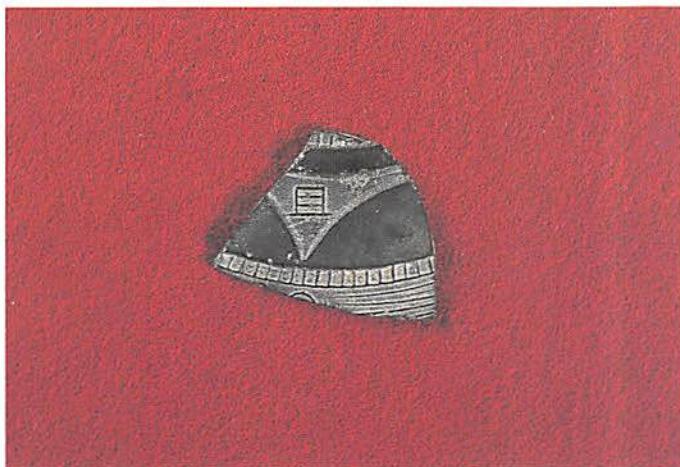
(表紙イラスト：本館学芸員 明比加奈恵)



▲写真1

遺跡全景【1965(昭和40)年頃】
白線内は史跡指定地、点線内は発掘調査地

①若宮古墳



▲写真2 内行花纹鏡片／柳瀬遺跡【下関市教育委員会提供】



写真3 多鉢細文鏡・細形銅劍【複製品】／梶栗浜遺跡▶



▲写真4 蓋弓帽【複製品】／稗田地蔵堂遺跡



▲写真5 土笛(陶埙)／綾羅木郷遺跡

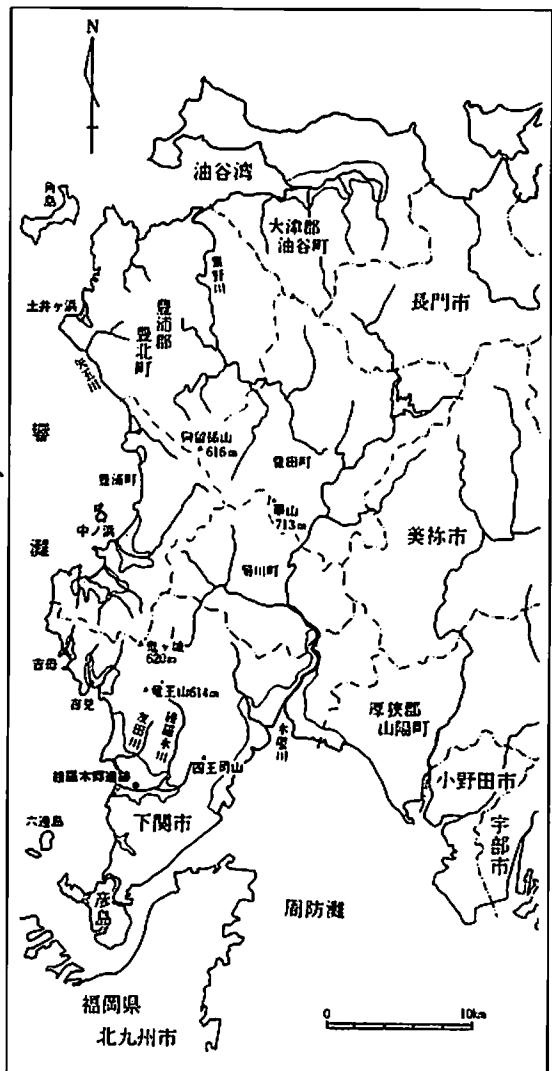


▲写真6 山陰系土器／秋根遺跡

1. 綾羅木平野の歴史

竜王山の東麓から流れ出る綾羅木川(全長約13km)の堆積作用によってできた綾羅木平野の北側、西南西にのびる台地上に綾羅木郷遺跡があります。標高は8～13mで、その北側には梶栗川の堆積による平野が広がり、西側の海岸線は砂浜になっています。響灘沿岸の北浦地域では海岸線のすぐ側まで中国山地が迫っていて、平野の規模はいずれも小さく、もっとも広い綾羅木平野でも東西は約2.8km、南北は約0.8kmほどです(第1図)。下関市内の遺跡の多くは綾羅木川と梶栗川の流域に分布していますが(第2図)、それではいつ頃からこの地域に人が住み始めたのでしょうか？そこから話を始めることにしましょう。

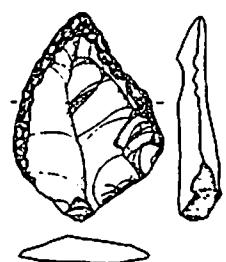
なお、遺跡名に付けた番号は第2図の番号と対応しています。また、各時代の年代については25頁の年表も参考にして下さい。



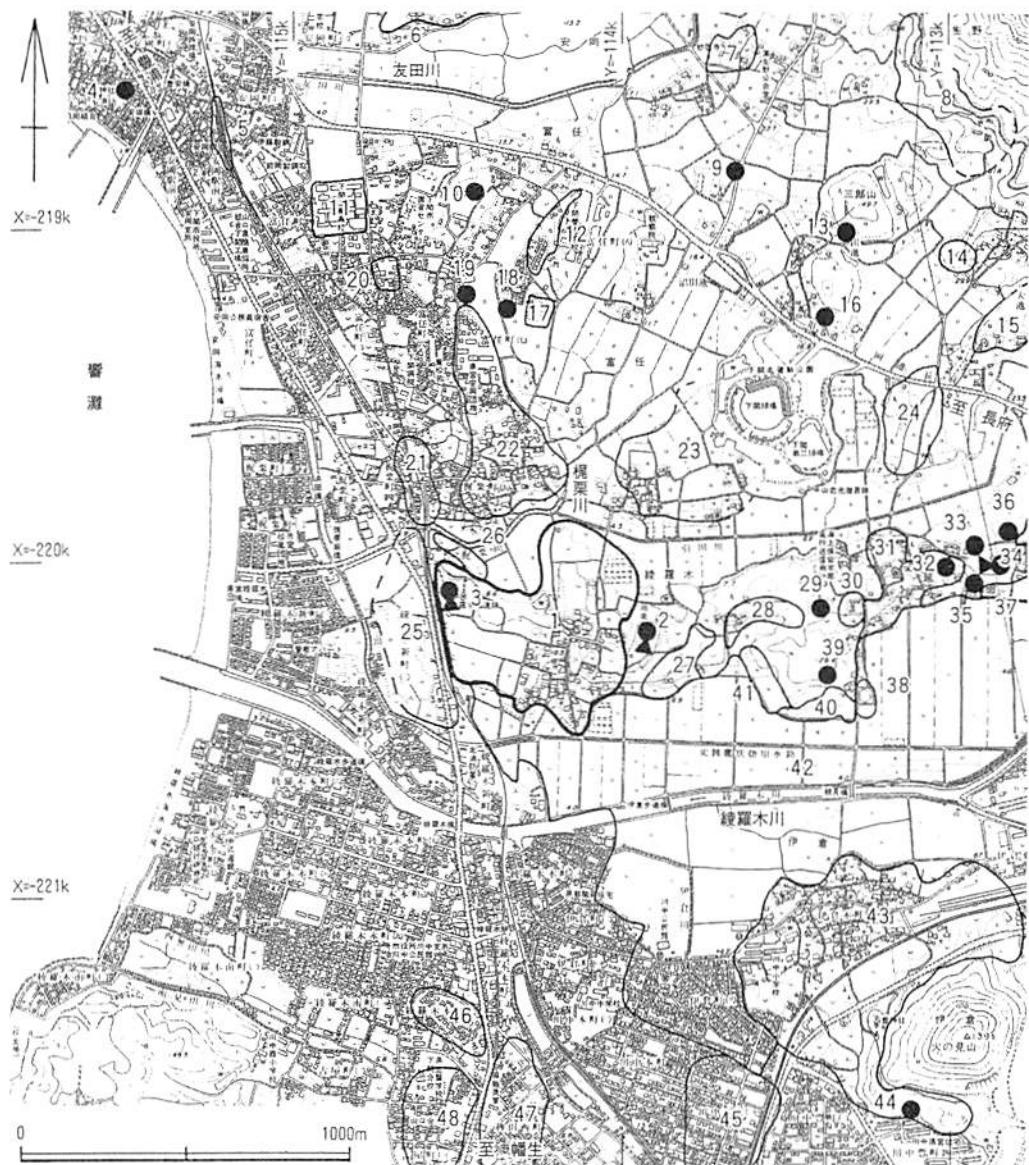
第1図 響灘沿岸地域図(文献1より)

1-1 旧石器～縄文時代

今のところ、綾羅木平野でもっとも古い人工物は後期旧石器時代の石器で、綾羅木郷遺跡(1)や延行条里遺跡(42)、そして平野東端部の秋根遺跡で発見されています。後期旧石器時代は今から約3万～1万3千年前で、最終氷期(ヴュルム氷期)の終わり頃にあたります。ただし、さらに古い中期旧石器時代(約15～3万年前)の石器(斜軸尖頭器)に似た石器が綾羅木郷遺跡でも出土しているので、この地域に人が住み始めた時期がさらに古くなる可能性があります。



▲斜軸尖頭器(文献2より)



第2図 綾羅木郷遺跡周辺の地形と遺跡分布(文献3より)

- | | | |
|----------------------------|--------------------------|-----------------------------|
| 1 綾羅木郷遺跡(集落・埋葬跡、弥生時代～中世) | 17 三太屋敷(鉢跡、中世) | 33 仁馬山2号墳(円墳、古墳時代) |
| 2 上ノ山古墳(前方後円墳、古墳時代) | 18 万福寺山古墳(円墳、古墳時代) | 34 仁馬山古墳(前方後円墳、古墳時代) |
| 3 若宮古墳(前方後円墳、古墳時代) | 19 七辻古墓(埋葬跡、中世) | 35 仁馬山3号墳(円墳、古墳時代) |
| 4 東条遺跡(埋葬跡、中世か) | 20 清寺貝塚(貝塚、縄文時代) | 36 上ヶ原古墳(方墳、古墳時代) |
| 5 安岡駅構内遺跡(祭祀・製塙跡、奈良時代か) | 21 梶栗浜遺跡(埋葬跡、縄文時代～弥生時代) | 37 八幡遺跡(散布地、弥生時代～中世) |
| 6 上げ安岡遺跡(集落跡、弥生時代) | 22 梶栗遺跡(集落跡、弥生時代) | 38 丸小山遺跡(集落跡・遺物包含地、弥生時代～中世) |
| 7 蒲生野郷遺跡(遺物包含地、弥生時代か) | 23 引田遺跡(集落跡、弥生時代) | 39 みやばし古墳群(円墳基、古墳時代) |
| 8 横田遺跡(遺物包含地、弥生時代) | 24 法寂寺古墳群(円墳、古墳時代) | 40 幸地・森遺跡(集落跡、弥生時代～中世) |
| 9 墓の下遺跡(遺物包含地) | 25 打越遺跡(散布地・水田跡、弥生時代～中世) | 41 駿遺跡(集落跡、縄文時代～弥生時代) |
| 10 官林山古墳(円墳、古墳時代) | 26 馬場遺跡(埋葬跡・集落跡、弥生時代～中世) | 42 延行条里遺跡(集落・耕地跡、弥生時代～現代) |
| 11 神田遺跡(貝塚・集落跡、縄文時代～平安時代) | 27 重武屋敷遺跡(集落跡、弥生時代～中世) | 43 伊倉遺跡(集落跡、弥生時代～中世) |
| 12 富住八幡宮遺跡(埋葬跡、古墳時代) | 28 駅ノ上遺跡(散布地、古墳時代～中世) | 44 山の奥遺跡(遺物包含地、弥生時代) |
| 13 三郎山古墳群(円墳・横穴式石室、古墳時代) | 29 岡古墳(円墳、古墳時代) | 45 稲田道祖遺跡(遺物包含地) |
| 14 王子稚現山古墳(前方後円墳か、古墳時代) | 30 岩遺跡(集落跡、弥生時代～中世) | 46 高山遺跡(集落跡、弥生時代) |
| 15 上有富古墳(遺跡?) (遺物包含地、弥生時代) | 31 延行郷遺跡(埋葬・集落跡、弥生時代～中世) | 47 稲田遺跡(集落跡、弥生時代) |
| 16 一升塚古墳(円墳、古墳時代) | 32 奥の屋敷古墳(円墳、古墳時代) | 48 古屋遺跡(集落跡、古墳時代) |

約2万年前に最終氷期(ヴュルム氷期)の中でも最も寒い時期を迎えます。現在の山口県の年平均気温は15.7℃ですが、当時の年平均気温は現在より7～8℃低かったと推定されています。今で言うと、東京が札幌とほぼ同じ気候で、札幌は樺太中部と同じくらいだったことになります。

その後、しだいに暖かくなっていきますが、それにともなって食料となる動物や植物も豊かになりました。そして、約13000年前に木の実を煮るための道具として土器が作られるようになったのです。さらに、弓矢や落とし穴を利用してシカやイノシシを捕まえたり、貯蔵穴にドングリなどの木の実を貯えることも始まりました。これ以降を縄文時代と呼んでいます。

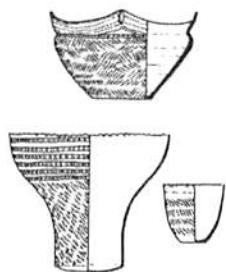
縄文時代になっても気候は引き続いて温暖化し、年平均気温は、紀元前6000年頃で現在とほぼ同じ、もっとも暖かくなった紀元前4000年頃には現在より、気温が約2℃、そして海平面も3～5mほど高かったことがわかっています。このように海面が上昇することを「海進」と呼んでいます。

縄文時代は草創期(紀元前13000～8000年頃)、早期(紀元前8000～4000年頃)、前期(紀元前4000～3000年頃)、中期(紀元前3000～2000年頃)、後期(紀元前2000～1000年頃)、晩期(紀元前1000～300年頃)の6つの時期に区分されていますので、ここでも、この区分にしたがって話を進めることにしましょう。

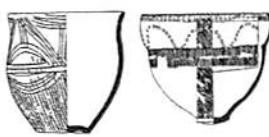
綾羅木郷遺跡周辺の草創期と早期の遺跡についてはよくわかっていないせんが、前期になると、遺跡数が増えてきます。おそらく人口が増えたのでしょう。神田遺跡(11)や梶栗浜遺跡(21)はよく知られていて、瀬戸内系の土器や九州系の土器が発見されています。いずれも当時の海岸線付近に位置していますが、やや丘陵寄りにある延行条里遺跡でも前期の土器が発見されています。



▲縄文前期の九州系土器
(文献4より)



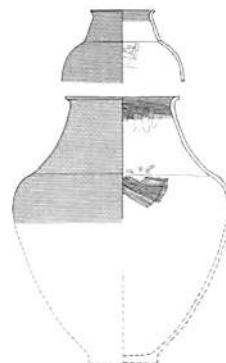
▲縄文前期の瀬戸内系土器
(文献4より)



▲縄文中期の瀬戸内系土器
(文献4より)



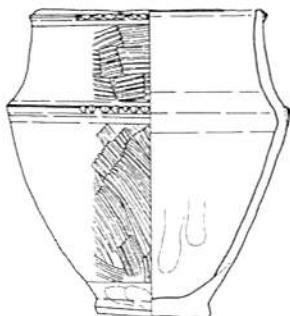
▲縄文中期の九州系土器
(文献4より)



▲丹塗磨研壺(文献5より)

* 丹塗磨研壺

壺の形を作った後、赤い顔料を混ぜた泥を表面に塗り、さらに表面を磨いて焼き上げた土器。



▲刻目突带文土器
(文献6より)

中期の遺跡では神田遺跡と潮待貝塚(20)がよく知られています。前期と同じように瀬戸内系の土器と九州系の土器が発見されていますが、量は多くありません。山口県内でも中期の遺跡は少ないのですが、その理由はよくわかつていません。

後期の前半頃、この地域では小さな海進があったようです。そして、海水面が再び下がった後期の中頃に、潮待貝塚では貝塚が形成され始めます。貝塚は昔の“ゴミ捨て場”的跡ですから、貝塚があるということは、人々がその近くに一定期間住み続けていたことを示しています。この遺跡でもやはり瀬戸内系と九州系の土器が発見されました。また、神田遺跡でも後期の土器が発見され、弥生時代のものに近い11基の貯蔵穴もありました。この遺跡でも後期の中頃に貝塚が作られています。

晩期の遺跡についてはよくわかつていませんが、その終わり頃(あるいは弥生時代早期)の土器(刻目突帶文土器)きざみめとったいもんどきは延行条里遺跡(下層)や秋根遺跡、六連島遺跡で出土しています。これらの土器は、福岡県福岡市の板付遺跡で発見された日本最古の水田遺構とほぼ同じ時期のもので、さらに、水稻耕作と一緒に朝鮮半島から伝わった丹塗磨研壺にぬりまんづば^{*}の胴部片も延行条里遺跡で見つかっています。

1-2 弥生時代

前期(紀元前4～2世紀)の後半頃に郷台地の上で人々の生活が営まれていました。その跡が綾羅木郷遺跡で、現在も考古博物館の北側に遺跡の一部が残っています。1000基以上の袋状豊穴(貯蔵穴・地下式倉庫)とこれらを取り囲む溝(環濠)ふくろじょうとうあな^{かんごう}があつたようですが、台地上で弥生時代の住居跡は発見されていません。綾羅木郷遺跡については次の章で詳しく述べることにしましょう。

綾羅木平野の南側の伊倉遺跡(43)や東端の秋根遺跡は前期の終わり頃の遺跡です。この頃、北部九州や近畿地方でも遺跡の数が増えることが知られています。

ところが、中期(紀元前2～紀元1世紀前半)になると様子が大きく変化します。綾羅木郷遺跡では中期前半に、伊倉遺跡では中期後半にその規模が小さくなり、伊倉遺跡ではより高い小尾根へと分かれていったのです。いったい、何があったのでしょうか？その理由として、海面の上昇が挙げられます。ピーク時には現在より約2mも海面が高かったようで、この高潮によって今までの耕作地が使えなくなつたためと考えられています。

他の地域をみると、北部九州や近畿地方では中期後半頃に大規模な集落(拠点集落)が出現しています。なかでも代表的な福岡県春日市須玖・岡本遺跡は「魏志倭人伝」に記された奴国を中心部と考えられています。

後期(紀元1世紀後半～3世紀後半)になっても、下関市域では遺跡の規模は小さかったようですが、後期の後半代から古墳時代の初頭にかけて規模の大きい集落が現れます。秋根遺跡や山陽町との境に近い柳瀬遺跡がその代表です。秋根遺跡では完全な形の日本製内行花文鏡が土坑墓から出土し、柳瀬遺跡では中国・後漢の「長宜子孫(長く子孫が繁栄するという意味)」と書かれた内行花文鏡片が当時の河川跡のすぐ側の土坑で発見されました。完形の鏡と鏡片では使われ方が異なっていたようです。完形鏡は遺体の側に添えられること(副葬品)が多いのに対して、鏡片はムラの祭りに使用されたと推定されています。

ここまでムラの様子を見てきましたが、お墓はどうだったでしょうか？

まず、箱式石棺から多鉗細文鏡と細形銅剣を出土した梶栗浜遺跡(21)が前期末～中期初めのお墓として有名です。



▲日本製内行花文鏡の推定復原図(文献7より)

*内行花文鏡
鏡の内側の文様帶(内区)に円弧をもつ鏡。連弧文鏡とも呼ばれる。漢代では、弧の間に「長宜子孫」などの文字を入れたものが多い。

*土坑墓
土中に穴を掘って、直接遺体を埋めた墓のこと。



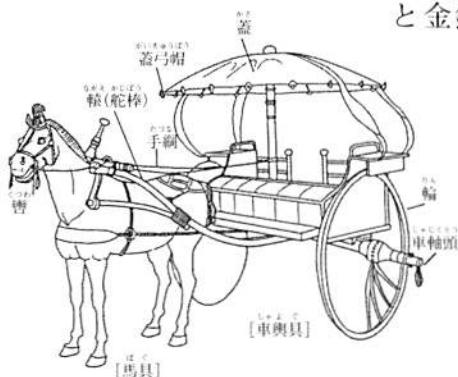
▲多鉗細文鏡・細形銅剣
【複製品】／梶栗浜遺跡

*多鉗細文鏡
2～3の鉗(つまみ)を裏面にもち、細かい線で鋸歯状の文様が施されている鏡。鏡面は凹面をなすものが多い。中国鏡と違って、東北アジアの青銅器文化の系統を引く。

遺跡のあたりは当時、海辺の砂丘でした。同じ頃、福岡県福岡市吉武高木遺跡や吉武大石遺跡、佐賀県唐津市宇木汲田遺跡などでも、青銅器や玉類などの副葬品が棺に納められるお墓(厚葬墓)が出現していて、このようなお墓に葬られたのはそれぞれの地域のリーダーだったと考えられています。

*前漢鏡

中国・前漢代に作られた鏡。武帝の楽浪郡設置(紀元前108年)をきっかけとして、弥生時代中期後半頃に朝鮮半島や福岡県を中心とした北部九州にもたらされた。



▲漢代の馬車各部の名称(文献8より)



▲蓋弓帽【複製品】／稗田地蔵堂遺跡

中期後半になると、平野を見渡す台地上に土盛りされたお墓(墳丘墓)が築かれるようになります。稗田地蔵堂遺跡や綾羅木郷台地の西端にある若宮古墳(3)周辺の墳丘墓がその代表です。稗田地蔵堂遺跡では箱式石棺に前漢鏡1面と金銅製の蓋弓帽2点が副葬されていました。

蓋弓帽というものは、馬車にさしかける傘の骨の先端につける飾り金具で、日本列島では稗田地蔵堂遺跡でしか発見されていません。前漢鏡も蓋弓帽も、現在の朝鮮民主主義人民共和国の平壌市付近と推定されている樂浪郡からもたらされたものです。樂浪郡というのは、前漢(紀元前202～紀元8年)の武帝が朝鮮半島を直接支配するため紀元前108年に設置した四郡のうちの一つです。樂浪郡のお墓には馬車に伴うさまざまな道具(車馬具)がセットで副葬されていて、稗田地蔵堂遺跡の場合と異なっています。このことは、まだ日本列島に馬車を使う風習は伝わらず、本来は馬車の道具であった蓋弓帽がその本来の役割を失って、首長(リーダー)の権威を裏付けるための道具(威信財)とみなされていたことを示しています。稗田地蔵堂遺跡の副葬品に見られる前漢鏡と蓋弓帽の組み合わせは、この地域のリーダーの墓にふさわしいものと言えるでしょう。

1-3 古墳時代～古代

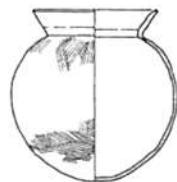
前方後円墳が築かれた時代を古墳時代(紀元3世紀後半～

6世紀)と呼んでいます。下関市内で最古の前方後円墳は仁馬山古墳(34)【長さ74m】で、5世紀初めに綾羅木川北側の低い台地上に築かれました。しかし、秋根遺跡や綾羅木郷遺跡ではそれより古い3世紀後半～終わり頃の山陰系土器や近畿系土器、さらには北部九州系の土器が出土しています。仁馬山古墳に続いてこの地域では、5世紀前半に若宮古墳(2)【長さ44.6m】、そして6世紀前半に上の山古墳(2)【推定長約100m】という2基の前方後円墳が築かれました。

その一方で、後期(6世紀代)になると、上有富古墳(15)や一升塚古墳(16)などの円墳、三郎山古墳群(13)、みやはし古墳群(39)などの群集墳が山麓部や台地上に築かれたのです。古墳時代の集落として、秋根遺跡や綾羅木郷遺跡、伊倉遺跡(43)、幸地ヶ森遺跡(40)、駅遺跡(41)などが知られています。

この地域の奈良時代(8世紀)の様子はよくわかっていない。続く平安時代の遺跡として秋根遺跡が有名で、郡の役所の跡(郡家)だろうという意見もあります。秋根遺跡には、すでに9世紀代に中国陶磁がもたらされていますし、中国陶磁や国産施釉陶器も多く出土しているので、早くから交易の中心地だったことがわかります。

一方、この地域の条里地割(水田の区画整理)も平安時代末期には完成して、綾羅木川の北側では低湿地を利用しての湿田から乾田へと変化し、現在の水田の地割りにまで継承されているのです。



▲近畿系土器／秋根遺跡
(文献7より)



▲山陰系土器／秋根遺跡

*条里制

主に水田などの耕地を対象とした古代の土地区画。その起源については大化改新(645年)の頃までさかのぼる可能性がある。

*湿田

地下水位が高い所で営まれた水田。地下水の影響を強く受け、絶えず水浸しの状態になっているため、排水が重要となる。

2. 遺跡の発見とその保存まで

時 期	地 区 名	備 考
1898~1901	寺屋敷	土器・石斧を発見
1949	"	土器を発見
1956	岡川家	第1次発掘調査
1958	若宮地区	若宮古墳第1次発掘調査
1959	"	若宮古墳第2次発掘調査
1965	A I, B I, C地区	第2次発掘調査
"	寺屋敷, A II, B II, D地区	緊急発掘調査
1966	A III・IV, B III, E I・II・III地区、F I・II, G I地区	"
1967	H I, E II, F II・III地区	"
"	J, K, L, M地区	史跡指定のための遺構確認調査
1968	H II, F IV・V・VI地区第一農道、E I, F I P I・II・III地区	
1969	P II・P III・R I・II・III地区遺跡破壊、T I・II, R IV, H III地区	国史跡に指定
1970	G II・III・IV・V・VI, F VII地区、H IV・V, F VII・IX・X, VII地区	
1971	V I, F XI・XII地区	
1972	V III・IV地区	

綾羅木郷遺跡調査略年表

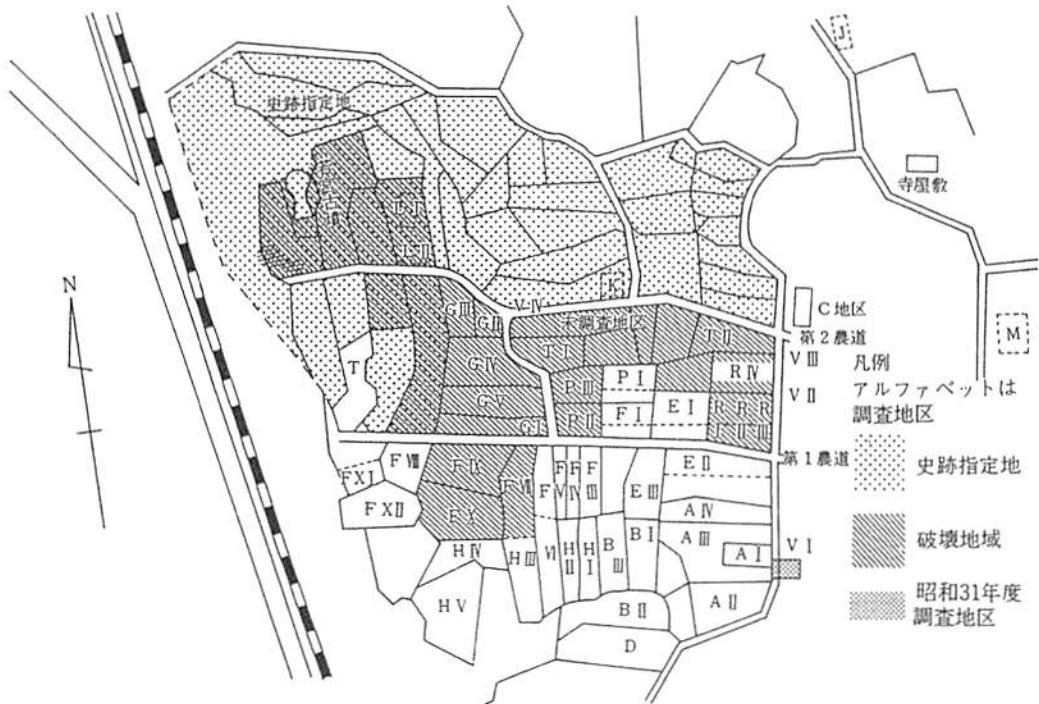
綾羅木郷遺跡が発見されたのは明治時代のことで、1900年頃に鍵谷徳三郎氏が寺屋敷地区で弥生土器の壺と石斧一点を発見したそうです(12頁表)。

第二次世界大戦中、この台地は軍隊によって利用されたため、この遺跡の発掘調査が最初に行われたのは1956年のことです。しかしその間も、吉村次郎氏らによって遺跡確認作業が継続して行われた結果、遺跡の範囲が約3万m²に及ぶことが推定されたのです。そして、1965年の6月から7月にかけて二度の発掘調査が行われ、10月からは珪砂採掘に伴う緊急発掘調査が行われることになりました。

珪砂といふのは自動車エンジンの部品などをを作る時の鋳型の材料になるもので、それまでベトナムのカムラン湾から輸入されていました。しかし、ベトナム戦争の影響で輸入することができなくなり、1965年の秋から、郷台地の下部の地層にある良質の珪砂を採る作業が始まったのです。



▲緊急調査の状況【撮影 グループS Y S(新谷照人・吉岡一生・清水恒治)】



▲綾羅木郷遺跡略図(文献1より)

それは同時に遺跡を掘り起こすことですから、専門家による発掘調査も併行して行われました。

このようにして1965年10月に始まった調査が進むにつれて、この遺跡の重要性が改めて知られるとともに、市民の間からも遺跡を保存しようという声が高まり、翌年5月には「郷土の文化財を守る会」ができたのです。しかし、遺跡の保存計画がなかなか進まず、遺跡が南側からどんどん破壊されたため、若宮古墳を含めた台地の北側を史跡に指定して保存するための確認調査が1967年の夏に行われました。

その後も遺跡保存のための動きと遺跡破壊が併行して続いていましたが、1969年3月8日の夜、珪砂を探っていた業者が、遺跡が史跡指定されることを防ぐため、11台のブルドーザーを導入して遺跡の残り部分を破壊し始めたのです。すぐに現地に駆けつけた発掘調査の関係者がブルドーザーの前に立ちはだかり、防ごうとしたのですが、遺跡は大き



▲ブルドーザーの前に立ちふさがる発掘調査関係者【撮影 グループSY'S(新谷照人・吉岡一生・清水恒治)】

く破壊され、その被害は北側の保存予定地の一部にまで及びました。

この事件は全国的に大きく報道され、埋蔵文化財を保護すべきだという声が高まり、3日後の11日には遺跡の一部、42,533.73m²が史跡として指定され、保存されることになったのです。今、考古博物館の北側に広がっている原っぱが保存によって守られた場所です。

綾羅木郷遺跡の発掘調査と保存運動には、一般市民や教員、学生など多くの人たちがボランティアとして参加し、またいろいろと協力されました。なかでも、「始原文化研究会」(1962年結成)や「郷土の文化財を守る会」の人々はその中心となって活動し、グループSYS(新谷照人・吉岡一生・清水恒治)によって撮影された遺跡破壊時の写真も、この遺跡の保存運動を後押ししてくれたのです。これら多くの人たちによって綾羅木郷遺跡が保存されたことを私たちはけっして忘れてはなりません。

考古博物館の正面ホールにある発掘作業風景のジオラマを構成する現代人は、遺跡を守ろうとした人たちをモデルにしています。何気ない、普通の発掘風景のように見えますが、今から30年ほど前に遺跡保存をめぐってドラマがあったことを、皆さんも知っておいて下さい。

3. 綾羅木郷遺跡って、どんな遺跡？

先に、綾羅木郷遺跡が国によって史跡に指定されたいきさつを述べましたが、その後に行われた明神・久保之上田地区や上ノ山地区などの発掘調査の成果も参考にして、綾羅木郷遺跡について今までにわかったことをお話ししますよう(第3図)。

旧石器時代については第1章で述べた通りですが、その後、この綾羅木郷台地上で人々が生活を営むのは弥生時代前期



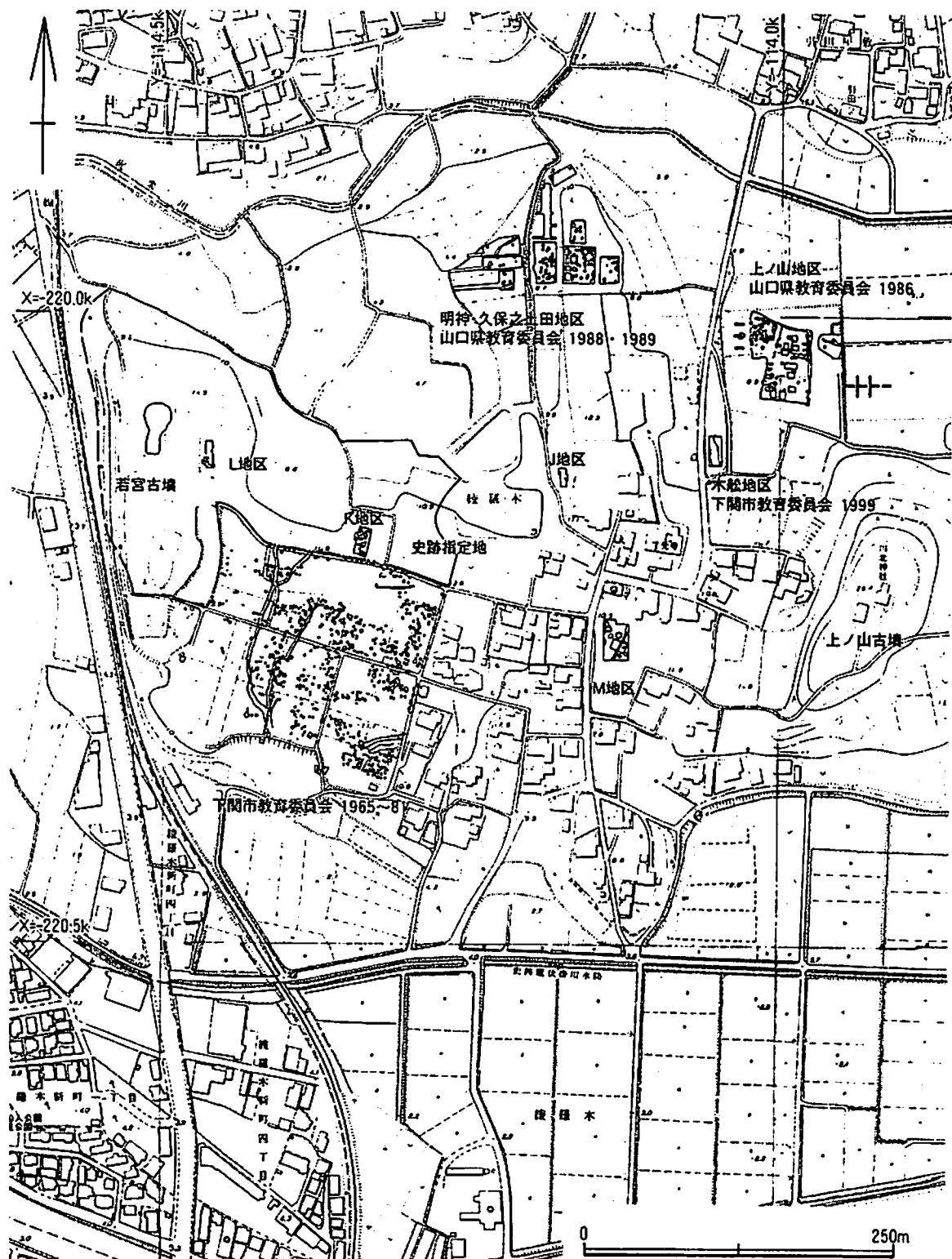
▲破壊された綾羅木郷遺跡(1)
【撮影 グループSYS(新谷照人・吉岡一生・清水恒治)】



▲破壊された綾羅木郷遺跡(2)
【撮影 グループSYS(新谷照人・吉岡一生・清水恒治)】



▲考古博物館ジオラマ



▲第3図 綾羅木郷道路発掘調査区(文献3より)



▲VI地区 溝断面

中頃以降のことです。そして、中期前半にはいったん利用されなくなります。

まず、弥生時代の前期中頃にこの台地上に溝が掘られました。その断面はV字状で、幅が2m以上、深さが場所によっては3mもあるような大きくて深い溝が、石仏・岡地区(史跡指定地の南側)で確認されています。たくさんの貯蔵穴群を取り囲むように掘られた溝は、時期が新しくなるにつれて外側に掘り直されていったようで、同時期に2~3本の溝があったわけではありません。一方、史跡指定地の北方の明神・久保之上田地区と上ノ山地区でも前期後半頃の溝と貯蔵穴群が発見されています。前者の場合は調査区の北西部で弧状の溝が、後者では調査区の東端で南北方向の溝が見つかりました。

しかし残念ながら、石仏・岡地区を見ても、もっとも西側の溝が北にどこまで延びるのか、東側で溝はどうなっているのか、さらに、西から延びる溝と東からの溝が南側でつながっていたのかどうかなど、わからない点がたくさんあります。さらに、台地の北東側の小さな谷部(木船地区)でも、南北方向に走る前期末頃の溝が確認されているのですが、この溝と他の地区で発見された溝との関係もよくわからていません。調査された範囲が限られていることもあって、今のところ、遺跡全体を説明することは困難です。

ところで、それぞれの発掘調査区で溝や貯蔵穴群などの弥生時代の遺構が見つかっているにもかかわらず、弥生時代の住居跡は発見されていません。なぜでしょうか？

その理由として、二つの可能性があります。まず、この台地上にもともと住居が建てられていたけれども、台地の土が削られたために住居の痕跡がなくなってしまったというのが一つ。あるいは、この台地は貯蔵穴、すなわち地下式倉庫を作るための空間で、住む場所は別の所にあったと



▲K地区 遺構確認状況



▲VIII地区 貯蔵穴断面

考えることもできます。皆さんはどう思っていますか？

この問題については、次章でもう一度触れることにしましょう。

ところで、綾羅木郷遺跡から出たモノ(遺物)にどんなものがあるでしょうか？ この遺跡から出土した弥生時代の遺物はすべて山口県指定文化財として登録されていて、その一部を考古博物館に展示していますので、見たことがある人もいるでしょうけど、ここで簡単に解説しておきましょう。

弥生時代の溝や貯蔵穴から、甕・壺・高坏などの日常土器とともに、磨製石庖丁・石鎌(収穫具)や扁平片刃石斧・抉入片刃石斧・鑿形石斧(加工具)、磨製石斧(伐採用)、石劍・石戈(武器形石製品)、石鏃などの石器が発見されています。そして、鉄斧やその材料とするための鉄板、ヤリガンナなどの鉄器も、少量ながら出土しています。

また、コメやムギなどの穀類、イチイガシやスダジイ、モモ、ウメ、クリなどの種子が炭になった状態で発見されていて、これらの植物を利用していたことがわかっています。その他に、アワやキビが栽培された可能性もあります。動物では、カモ類の他、イノシシやニホンジカ、ニホンアシカ、タヌキ、ニホンザル、クジラなどの骨と、マダイやキヂヌといった魚類の骨、ヤマトシジミやハマグリ、サザエなどの貝殻に加えてウニの棘なども見つかっています。こういったものが当時の食料だったのでしょう。

一方、海にすむ動物を捕獲するための道具、すなわち土製や石製の漁網錘、ヤスなどの刺突具(獸骨製)や、鯨の骨で作られたアワビオコシが出土したことからも、当時の人々が海産資源を積極的に利用していたことがわかります。

その他、翡翠やアマゾナイト製のペンダント、イノシシの歯を加工したペンダント、碧玉製管玉などの装身具も発



▲A III地区 貯蔵穴遺物出土状況

*甕：煮炊き用の土器

*壺：食べ物などを貯えるための土器

*高坏：食べ物などを盛るための土器



扁平片刃石斧／綾羅木郷遺跡



石戈／綾羅木郷遺跡

*翡翠(硬玉の別称)

縄文時代前期以降、勾玉などの玉類の素材として利用された。ガラス光沢のある緑色・白色で、中には暗緑色のものもある。新潟県糸魚川流域が産出地として有名。

*アマゾナイト

翡翠に似た石だが、日本では産出しない。稲作とともに朝鮮半島から伝來したと考えられる。

*碧玉

石英の一種で、緑色不透明のものが多い。弥生時代には、おもに管玉の素材として用いられた。

見されました。



▲人面土製品【複製品】
／綾羅木郷遺跡



▲土笛出土状態／綾羅木郷遺跡

興味深いのは、祭祀(祭り)と関連すると考えられる特異な遺物が出土したことです。人面土製品、土笛(陶埙)などですが、なかでも土笛は日本列島での最初の発見例ということもあって、その由来に关心が集まりました。その形が中国の殷代(紀元前1600～紀元前1100年頃)に盛行した卵形の土笛に似ているところから、殷の土笛の流れを汲むものと理解され、中国での呼び名である「陶埙」と名づけられたのです。その後の調査で発見された分も合わせて、綾羅木郷遺跡では7点の土笛が出土しました。今のところ、土笛は京都府から福岡県にかけての日本海沿岸部に分布していますが、島根県内でもっとも多く発見されています。そして、その大部分は弥生時代前期に属しているのです。

ところで、最近の中国での研究によると、殷に続く周代(紀元前1100年頃～紀元前770年)の遺跡から出土した陶埙の数量は殷代に比べてはるかに少なく、綾羅木郷遺跡とほぼ同時期の前漢代になると、卵形をした陶埙は見られないそうです。一方、数年前に長崎県壱岐・原の辻遺跡で卵形をしたココヤシ製の笛が発見されました。その時期が弥生時代中期で、日本の土笛の時期と近いことから、もともと、何か植物性の素材で作られていた笛を粘土で作るようになったのが、日本列島での土笛の起源ではないかという意見もあります。

やがて、弥生時代中期中頃以降になると、この台地は利用されなくなります。弥生時代の海岸は今のJR山陰線あるいは国道191号線あたりだったのですが、どうやら中期の前半代に海面が上昇して、この辺りに住めなくなったりしいのです。その後、この郷台地に人が住んだのは古墳時代になってからのことです。古墳時代中期(5世紀代)の後半頃の竪穴住居跡が1基発見されています。台地の南辺部

にあって、これには竈が備え付けられていました。さらに、それぞれの発掘調査区で古墳時代後期(6世紀)、あるいはその可能性がある遺構として、竪穴住居6基、掘立柱建物^{ほったてばしら}*6棟が見つかっています。古墳時代の遺物として、土師器^{はじき}や須恵器^{すえき}といった土器類の他に、鉄鎌^{かっせき}や滑石製ミニチュア製品があります。ちなみに、台地の西端にある若宮古墳は5世紀前半代、東側の上ノ山古墳(現 川北神社)は6世紀前半代に築かれたものです。

その他に、平安時代から鎌倉・室町時代にかけての遺構もこの遺跡で発見されています。掘立柱建物、土坑、木棺墓や火葬墓などで、それらから土師器や須恵器、そして中国製や国産の陶磁器が出土しています。

4. 弥生時代の村としての綾羅木郷遺跡

4-1 稲の来た道

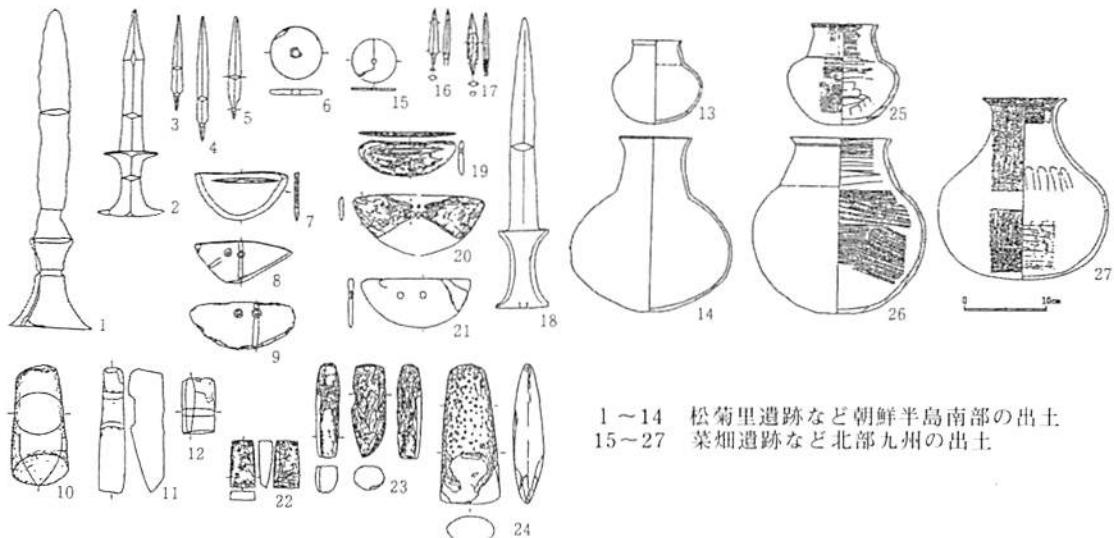
日本で最古の水田が確認されたのは福岡市板付遺跡で、その時期は紀元前4世紀頃です(縄文時代の終わり頃あるいは弥生時代早期)。この頃に日本列島に稲作が伝えられたと考えていいくらい。

日本へ稲が伝わったルートについては、華北(北方)、華中(江南)、そして華南(南方)の3つのルートが想定されています(第4図)。その各々について、さらにいくつかの意見がありますが、その頃の北部九州の遺跡で、朝鮮半島南部と共に通する土器や石器、

▲第4図 稲の伝播ルート(文献9より)

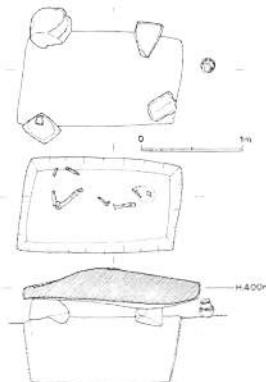
*掘立柱建物
直接地中に埋め込んだ柱を使って壁を作り、地表面を床面にする建物のこと。





1～14 松菊里遺跡など朝鮮半島南部の出土
15～27 菜畑遺跡など北部九州の出土

▲朝鮮半島南部と北部九州に共通する土器・石器(文献9より)



▲支石墓(文献10より)

* 支石墓

墓の上に大きな石を置いたもの。数個の石で支えるタイプは「碁盤型」と呼ばれ、朝鮮半島南部の無文土器時代に特徴的な墓。日本の支石墓はそのほとんどが縄文時代の終末から弥生時代初めにかけて作られ、分布も西北部九州に限られている。

支石墓や環濠(溝)集落などが出土していることから、朝鮮半島経由で伝来した可能性がもっとも高いと考えられています。また、この時期の日本で出土した炭化米は短粒型(ジャポニカ)に限られていて、韓国忠清南道松菊里遺跡(紀元前5～4世紀)出土の炭化米と非常によく似ています。

ただし、これ以前にも朝鮮半島南部の影響があったようです。たとえば、北九州市貫川遺跡で縄文時代晩期中頃(紀元前5世紀頃)の層から出土した磨製石包丁と孔列文土器がその証拠です。この磨製石包丁の形態は朝鮮半島の孔列文土器の時期に多くみられるものです。孔列文土器とは朝鮮半島の前・中期無文土器時代(紀元前8～5世紀頃)の土器で、口縁部に沿って連続して穴があけられています。日本では、その影響を受けた土器が縄文時代晩期中頃から弥生時代初頭にかけて出現し(紀元前5～3世紀頃)、南部・北部九州から島根県、岡山県にかけて分布しています。



▲磨製石庖丁(文献11より)



▲孔列文土器(文献12より)

ところで、ジャポニカには温帯型と熱帯型の2種類があり、現在の東南アジアの民族例をみると、前者は水田で、後者は焼畑で栽培されています。そして、熱帯ジャポニカを水田で栽培し続けても温帯ジャポニカには変化しないの

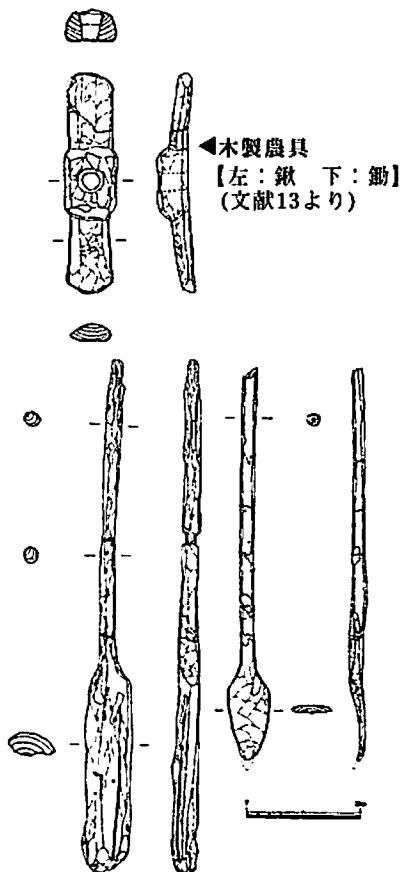
です。弥生時代の米は当然、温帶ジャポニカと考えられてきたのですが、最近コメのDNA分析によって、たとえば中期後半の滋賀県下之郷遺跡(紀元前1世紀後半頃)出土の炭化米に熱帶ジャポニカも含まれることが明らかになりました。一方、宮崎県えびの市桑田遺跡の縄文時代晩期の土層で検出されたイネのプラント・オパール^{*}も熱帶ジャポニカの可能性が高いとされていますので、これらのことから、水稻耕作に先立って南方ルートで伝來した稲による焼畑農耕が行わっていたとする意見が出されています。ともあれ、朝鮮半島南部で出土した米のDNA分析ができれば、そして、そこに熱帶ジャポニカが含まれるかどうかを確認できれば、日本への稲の伝来について新たな議論がなされるでしょう。

北部九州で受け入れられた水稻耕作は短時間のうちに他の地域に広がったようです。水田跡こそ発見されていませんが、磨製石包丁や磨製石鎌といった収穫具が出土した愛媛県大淵遺跡、板付遺跡と同様の木製農具(鍬・鋤)が発見された香川県林・坊城遺跡などでは、板付遺跡とほぼ同じ頃に水稻耕作が開始されていた可能性が高いのです。また、宮崎県坂元遺跡や岡山県津島江道遺跡で発見された水田跡がこの時期に遡る可能性もあります。

下関市内でも、この時期の甕や壺が少量ながら発見されていますので、近い将来、水田跡が見つかるかもしれません。期待しましょう。

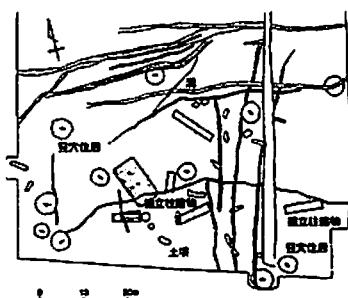
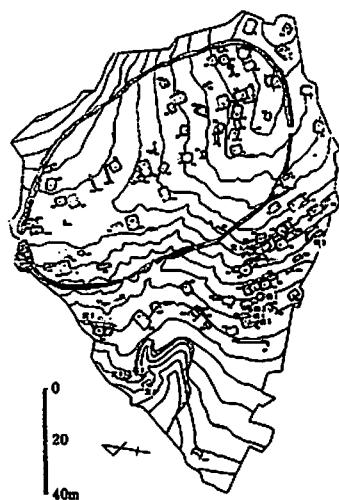
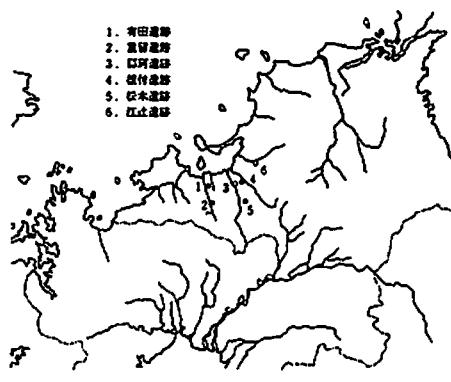
*DNA分析
DNAとは生物がもっている遺伝子の本体のこと。コメの場合、インディカとジャポニカ、さらにジャポニカでは温帶ジャポニカと熱帶ジャポニカで、DNAにわずかな違いがある。

*プラント・オパール
イネ科植物の葉に含まれる珪酸体といふガラス質の細胞が微化石になったもの。



4-2 環濠(溝)集落とは？

1. 有田遺跡
2. 高留遺跡
3. 須河遺跡
4. 岩代遺跡
5. 佐木遺跡
6. 江辻遺跡



縄文時代の終わり頃～弥生時代初頭(紀元前4～3世紀頃)にかけて、北部九州に村の周りを溝で囲んだ環濠集落が出現します。

そのうち、福岡市那珂遺跡では縄文時代の終わり頃に二重の環濠が巡らされていました。発掘調査された面積が限られているため、環濠で取り囲まれた内部はどうなっていたのかはよくわかつていませんが、外側の溝は直径約150mほどの円形に復元されています。

その規模は幅6～7m、深さ4mで、断面はV字形です。内側の溝は幅3.5m、深さ2.3～2.5mです。

しかし、縄文時代にはこのような環濠集落は見あたりません。その源流はどこにあるのでしょうか？

中国では陝西省の半坡遺跡(紀元前4800～3900年頃)や同じく姜寨遺跡(紀元前4000年頃)など、アワを主要作物としていた新石器時代にすでに環濠集落が出現しています。でも、日本における初期の環濠集落とは年代的な開きが大きいですね。そこで、年代的、地域的にもっと日本に近い朝鮮半島の環濠集落が、日本の環濠集落の直接の祖型として考えられているのです。その一つ、韓国・慶尚南道検丹里遺跡(紀元前6～5世紀)の場合、断面V字形の溝が丘陵頂部から斜面にかけて広がり、その規模は長径119m、短径70mで、内部面積は約6000m²、この遺跡では環濠の内外から93基の竪穴住居跡が発見されましたが、貯蔵施設は確認されていません。綾羅木郷遺跡の場合と逆ですね。

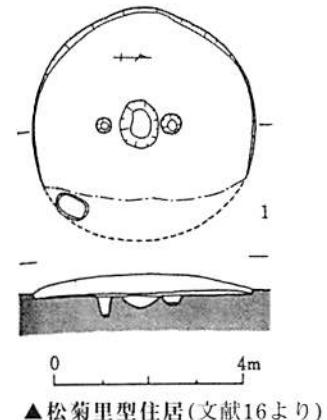
ところで、那珂遺跡と同じ頃の福岡県江辻遺跡では環濠の内側で円形竪穴住居跡9基、掘立柱倉庫建物跡5棟などが発見されました。住居が環状に配置され、さらにその内側にも住居と掘立柱倉庫が建てられていましたが、この遺跡で確認された竪穴住居は、すべて縄文時代とは系譜を異

にする松菊里型住居だったのです。松菊里型住居というの
は韓国・忠清南道松菊里遺跡で最初に発見されたもので、
円形の穴を掘り、床の中央部に設けられた楕円形の穴の両
端に中央の柱を立てる家のことです。

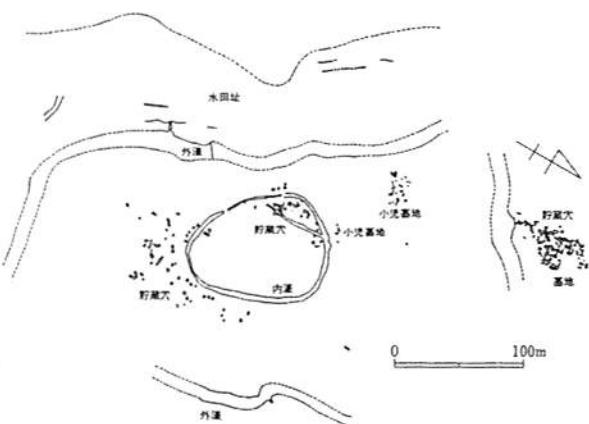
やや時期が下り、弥生時代初頭～前期前半代の環濠集落
として、福岡市重留遺跡^{しげとめ}が挙げられます。ここでは長さ
150m以上に及ぶ環濠が巡らされ、環濠の外側で竪穴住居
跡9基、墓地および貯蔵穴が、内側で竪穴住居跡7基が確
認されました。そして、ほぼ同時期の福岡市板付遺跡では
低台地上のほぼ中央に110m×80mの環濠、さらにその外
側にも370m×170mの環濠が存在し、それぞれの環濠内外
で貯蔵穴群や井戸が発見されています。住
居は内側の環濠内にあったとする意見も
あるのですが、残念ながらよくわかつていま
せん。

前期中頃から後半にかけて、北部九州以
外の地域でも環濠集落が現れます。綾羅木
郷遺跡や広島県亀山遺跡、兵庫県大開遺跡、
京都府扇谷遺跡、奈良県唐古・鍵遺跡、愛
知県高藏遺跡などがそれで、中国～東海地
方にかけて分布し、さらに東の群馬県注連
引原遺跡も前期後半の環濠集落です。環濠集落の全体がわ
かっている遺跡は多くないのですが、この時期には、その
内部に貯蔵穴群だけが作られる“貯蔵穴管理用”環濠が確
実に存在しています。亀山遺跡や扇谷遺跡、福岡県葛川遺跡、
光岡長尾遺跡、三沢北中尾遺跡などでは、環濠の内側で貯
蔵穴は発見されているのですが、住居跡は確認されてい
ません。村の人たちは別の場所に住んでいたと考えられてい
ます。

前にお話したように、綾羅木郷遺跡でも弥生時代の住居



▲松菊里型住居(文献16より)



▲板付ムラ(文献9より)

	九州	中国・四国	近畿
早期	那珂(福岡)		
前期	有田(福岡) 板付(福岡) 葛川(福岡) 光岡長尾(福岡)	綾羅木郷(山口) 田見当(高知) 百間川沢田(岡山) 大宮(広島)	大開(兵庫) 安満(大阪) 猪谷(京都)
中期	原の辻(長崎) 比恵(福岡)	宮ヶ久保(山口) 岡山(山口)	池上曾根(大阪) 唐古・鍵(奈良) 伊勢(滋賀)
後期	吉野ヶ里(佐賀) 平塚川添(福岡)	清水(山口)	平等坊・塔室(奈良) <small>いづかがみそね</small> 観音寺山

▲西日本の環濠集落(文献15より)

跡は発見されていません。当時の地表面が削られたため、住居跡も一緒に削られて消滅したとする意見もありますが、古墳時代の住居跡が発見されていることを考えると、この遺跡の環濠の内側に住居がなかった可能性が高いのです。

弥生時代の中期以降、西日本では大規模な環濠集落が各地域の中心的な集落となっていきます。那珂遺跡や板付遺跡、唐古・鍵遺跡、大阪府池上曾根遺跡などが、前期に引き続いて中心的集落として営まれる一方で、中期の前半頃、人々は綾羅木郷台地からいったん姿を消したのです。

原始・古代年表

西暦	中 国	朝 鮸 半 島	日 本
1000	1600頃～・殷建国 1100頃・周建国		縄文時代(10000頃～)
770	春秋時代	青銅器時代	
500	450頃・戰国時代		水田耕作伝来
400			弥生時代
300	221・秦中国統一 202・前漢建国	初期鉄器時代	
200			
前100		108・武帝(前漢) 楽浪郡ほか四郡設置	
100		原三国時代	この頃、倭国は百余国に分立。 中国に渡航するものあり。 『漢書地理志』
0	8・新(王莽)建国 25・後漢建国	57・新羅建国 37・高句麗建国 18・百濟建国	57・奴国王、後漢に使者を送る 「漢委奴国王」金印を授かる
後100			107・倭国王帥升ら、後漢に使者を送る 180頃・倭国大乱
200	220・三国時代(魏・呉・蜀)	205頃・帶方郡設置	239・卑弥呼、魏に使者を送る 248頃・卑弥呼死亡
300	280・西晋中国統一 316・西晋滅亡 (五胡十六国時代) 318・東晋建国	三国時代	古墳時代
400	420・東晋滅亡、宋建国	400・高句麗、倭軍を破る 414・高句麗長寿王、広開土王碑を建てる	372・肖古王(百濟)七支刀 を倭王に贈る 425・倭の五王、宋に使者を送る(～478) 471・稻荷山古墳(埼玉)出土鐵劍 478・倭王武(雄略)、宋に使者を送る
500		562・伽耶滅亡	527・筑紫君磐井の乱 538・百濟より仏教公伝 588・飛鳥寺の造営開始
600	589・隋中国統一 618・唐成立(～907)	660・百濟滅亡 663・倭水軍、白村江で大敗 668・高句麗滅亡	歴史時代(飛鳥時代) 645・大化改新、難波宮遷都 694・藤原京遷都
700		統一新羅時代 (668～935)	710・平城京遷都

- 1 伊東照雄編『綾羅木郷遺跡Ⅰ』1981年 下関市教育委員会
- 2 旧石器文化談話会編『旧石器考古学辞典』2000年 学生社
- 3 石田陽子編『綾羅木郷遺跡－木船地区－』2000年 下関市教育委員会
- 4 日本第四紀学会ほか編『図解・日本の人類遺跡』1994年 東京大学出版会
- 5 山崎純男「弥生文化成立期における土器の編年的研究」『古文化論攷』1980年 鏡山 猛先生古稀記念論文集刊行会
- 6 下村 智編『雀居遺跡』2 1995年 福岡市教育委員会
- 7 下関市教育委員会編『秋根遺跡』1977年 下関市郷土の文化財を守る会
- 8 大阪府立弥生文化博物館編『弥生人の見た楽浪文化』1993年 大阪府立弥生文化博物館
- 9 高倉洋彰『金印国家群の時代』1995年 青木書店
- 10 橋口達也編『新町遺跡』1987年 志摩町教育委員会
- 11 前田義人・武末純一「北九州市貫川遺跡の縄文晩期の石庖丁」『九州文化史研究所紀要』第39号 1994年 九州大学九州文化史研究所
- 12 宇野慎敏編『長行遺跡』1983年 (財) 北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室
- 13 (財)香川県埋蔵文化財調査センター編『林・坊城遺跡』1993年 香川県教育委員会 ほか
- 14 鄭澄元・安在啓「蔚州検丹里遺跡」『考古学研究』第146号 考古学研究会
- 15 武末純一「弥生環溝集落と都市」『古代史の論点』3 1998年 小学館
- 16 中間研志「松菊里型住居」『東アジアの考古と歴史』中 1987年 同朋舎

綾羅木郷遺跡って、どんな遺跡!?

発行日 2003年2月28日
発 行 下関市立考古博物館
〒751-0866
山口県下関市大字綾羅木字岡454
TEL 0832-54-3061
FAX兼 0832-54-3062
<http://www.koukohaku.shimonoseki.yamaguchi.jp/>

印 刷 有限会社エポック



下関市立考古博物館